

2010年8月3日(火)発行

ホルムズ海峡損傷事件について

▼ 誰が「攻撃」と示唆したのか

～情報収集と評価・判断の狭間～

海賊レポート編集長 石田徹

ホルムズ海峡で起きた商船三井(MOL)のVLCC M. STAR(16万総トン)の損傷事件は大きな衝撃を与えた。日本のエネルギー輸送のゴールデンルートで、この安全航行は極めて重要だからだ。それ故、原因が大きな意味を持つてくる。日本タンカーを狙っての攻撃なら国家的安全保障策が問われるし、偶発的な事故なら個別事例として処理できる。まさにクライシスマネジメントの事例である。入手できる情報に限りがあるが、どの場合にも最も大切で、また最も難しい事態の把握と評価・判断について、私自身の思考回路も示しながら考えてみたい。

一報を聞いた後、MOLのホームページで会社側のリリースを見たら、「外部からの攻撃が原因と疑われる爆発により、船体への損傷が発生しました」とあった。発生時刻は真夜中の0時半、時差5時間だから日本には早朝に連絡が入っており、検討する時間的な余裕はある。それで「原因不明」ではなく「外部からの攻撃」という以上、開示されたかどうかは別にして根拠はあるはずである。また、海外ということもあって監督官庁との摺り合わせはなく、発表されることは少ないから、当然海の専門家で海賊問題も所管している国土交通省の判断もその線なのだろうと推測された。

海賊、テロ、それとも事故？

最初に頭をよぎったのは、テロだった。海賊なら経済的利益を得るのが目的なので、タンカーへのアタックがなければおかしいが、そのような証言は何もなかった。直線で2000キロほど離れた海域が主戦場のソマリア海賊は東進を続けていたが、海上が荒れるこのモンスーン時期に遠出はしていない。数百トンクラスの漁船を母船にアタックチーム用の10人も乗れば一杯の小型ボート数隻を従えて遠征するスタイルが多いソマリア海賊は、公海上での漁業操業が隠れ蓑で、わざわざ狭いホルムズ海峡まで入って攻撃するメリットが浮かばなかった。これまでもホルムズ海峡から抜けてイ

インド洋をアメリカに向けて航行していた船を攻撃しており、それで十分だと思えたからだ。あのしつこい海賊が遠くから1発攻撃しただけで止めるとは思えないし、命を掛けて稼ぎにありつこうという切実感が感じられないのである。

テロを考えたのは、攻撃が目的だからだった。昨年から「アラビア半島のアルカイダ」がイエメンで海上でのテロ攻撃の訓練を行った、という情報があり、今春から英米の情報機関(多分)もたびたび海上での商船を狙ったテロ情報を出して来た。場所は紅海からマラッカ海峡までと広く、アルカイダ系組織の名前が取りざたされてきた。情報は公開されたとたん過去の情報になってしまうが、こうした匂いがしていたことは確かだ。ちょうど10年前にはイエメンで米艦船への自爆テロがあり、イスラム過激派のターゲットは英米だと考える人も多いが、さまざまな理由から大型タンカーなど西側の富を象徴するものを破壊すれば一定の宣伝効果はあるので、タンカーへの攻撃はどこの国であっても排除できないと考え、自分も警告してきた経緯があったからだ。しかし、これもどうもおかしい。爆破とか炎上しなければ宣伝効果は小さいし、これまでの計画は覚悟の戦いを求めてきたのと合わないのである。体当たりなら分かるが、遠くから1発はない。被害程度を見ても仮にテロなら大失敗計画である。

そうすると残るのは偶発的な事故になるが、28日の段階で具体的な事故の中身は浮かばなかった。地震後の異常波なんて想像もできなかったし、潜水艦との接触・衝突という発想も出てこなかった。「外部からの攻撃が原因と疑われる爆発」と、当事者が判断していることも大きかった。

MOLと国土交通省のコメントは外部からの攻撃だが

翌日29日、MOLは船内などの写真を公開した。当然国土交通省の専門家も見てはらずで、弾薬による爆発かそうでないかの評価はすんでいると思われる。「外部からの攻撃」の証拠物なのだが、素人目には幾つか疑問点が残った。それは例えば、ドアは壊れているが壁など構造部分は無傷に見え、風などによる破壊のようにも思えた。テーブルの画像は台風や地震など自然災害にもみられる光景で、弾薬による破壊ではないように感じられた。救命ボートがなくなったのも、自然災害時にもある光景だった。ミサイル攻撃や海賊の火器攻撃後画像などはかなり見てきたが、それとは破壊の姿が異なる印象である。

「攻撃」とは何によるものなのだろうか。火器なのか、小型ミサイルなのか、ロケット弾なのか。何で壊れたかの原因特定が必要だが、弾頭や破裂した弾の一部も見つかっていないようだから、仮に火器で攻撃されたのだとしても、当たってはいないことに

なる。とすると、近くを通過した衝撃波でドアが壊れ、ボートが持って行かれたことになる。これは説得力が弱いので、外国メディアはしつこく聞いたのであろう。戦争に慣れ、悲惨な被害状況を見慣れている外国メディアの記者としては、被害状況などから「外部からの攻撃」とするのは非合理的と映ったのかもしれない。MOLと国土交通省のコメントとして「外部からの攻撃の可能性」を引用した後、「しかし」と展開する記事が目立っている。確かに船腹のへこみ画像は「外部からの攻撃」を肯定する材料にはなりにくいように感じる。

国家的危機管理のスキルが試された

まだ原因が特定されたわけではないが、事ほど左様に断片的情報を寄せ集めて起こっていることの「姿」をつかむことは難しいのである。この情報収集と評価・判断、それも初期段階のものが、極めて重要となる。「水平線に光を見た」「その後爆発音を聞いた」が事実の証言だったとしても、それが雷ではなく、火器のものだったと判断するためには、光の形、音色、衝撃波、周りの一般的な音などを複合的に評価しなければ、漆黒の闇の中での攻撃とは判断できないだろうし、ドアが壊れて室内がぐちゃぐちゃになったとしても、その原因となるものは何なのかを推し量る、着弾の有無などの確認がまず必要となる。時間軸に沿った事実のリストアップも姿を固めていく際、有効だったりするが、基底に知識と常識があるのが、当然である。「右舷の部屋のドアが吹き飛んで中がめちゃくちゃになった」「光ったのを見た」「すごい音を聞いた」「朝になったら右舷のボートもどこかに消えて、支えも壊れていた」。これだけで「外部からの攻撃の疑い」と判断したはずはないので、他に何かあるのだろう。今後開示されるかもしれないが、とりわけ重要なのは国も追認していたことだ。国際社会の中で国家的危機管理のスキルが試されたことになる。

さすがと思ったのは、ロイターの記事である。28日からアラブ首長国連合(UAE)のフジャイラと東京でまとめ、「タンカーがダメージを受け、1人が負傷した。MOLは攻撃があった可能性があるといっているが、港湾当局者はその証拠はないといっている」とし、直前にあった地震による異常な波説も紹介した。APも攻撃説には懐疑的で、UAEのメディアも攻撃説は採っていない。29日になって港湾当局者の話として、「何かに衝突したのかもしれない。たとえば潜水艦とか」という接触・衝突説を報じている。28日夜、現地メディアを含めて読んだが、攻撃説には否定的で地震による事故説も出ていた。外国メディア(電子版)の更新時間は夜8時ごろ(日本時間)だったと思われる。翌日朝の日本のメディアは「被弾か」「攻撃?」「外部から攻撃か」「海賊?」だった。



Pirates Confidential Report

海賊レポート

 株式会社 カイト
KITES CORPORATION

〒103-0015 東京都中央区日本橋箱崎町20-5
TEL 03-3661-1725 FAX03-3661-1798

<http://gulfnews.com/news/gulf/uae/emergencies/gulf-oil-tanker-damage-due-to-unknown-reasons-1.661099>

<http://english.aljazeera.net/news/middleeast/2010/07/2010729151751119208.html>

注：標記されているホームページアドレス及び内容は発行日現在のものです。